

日本介護支援協会

Association of Supporting Care Service Management

ニュース

2018
SPRING

Vol.
58

CONTENTS

- 2 ……社会福祉法人の未来に向けて
地域社会全体のための老人福祉施設へ
淑徳大学 准教授 山下興一郎
- 3 ……平成30年度「介護報酬改定」のポイント
- 10 ……ケアマネさん がんばって!
そもそも「良いケアマネ」とは
医療法人社団裕和会 長尾クリニック 院長 長尾和宏
- 12 ……研修 Report 外国人介護人材採用促進合同交流会
介護分野の技能実習生の健全な受入体制構築に向けて
「介護分野の人材確保をめぐる動向について」
厚生労働省 社会・援護局福祉基盤課
福祉人材確保対策 室長補佐 平岡 敬博

地域社会における
社会福祉法人の
役割を考える

- 15 ……地域公益活動インタビュー
住民の声をつなぐ六高台福祉会の取組み
社会福祉法人 六高台福祉会
- 20 ……82歳 現役ドクターがすすめる 攻めの養生
死を意識した生き方
医療法人直心会 帯津三敬病院 理事長・名誉院長 帯津良一
- 22 ……EPA介護福祉士候補生の未来に向けて
有限会社いとう総研 代表取締役 伊東利洋
- 23 ……平成29年度 第3回 理事会

住民の声をつなぐ 六高台福祉会の 取組み

社会福祉法人 六高台福祉会

昭和62年、千葉県松戸市で2番目となる特別養護老人ホーム(従来型多床室)を開設以来、地域住民のニーズに応じて事業を展開。

公益的な取組みが義務化され、様々な取組みが行われていますが、その取組み方には温度差があるといわれています。そうした中で、本来あるべき社会福祉法人の姿を体現している六高台福祉会の皆様に、公益事業に対する考え方をうかがいました。

住民の日常的な会話から 困りごとを把握し解決へ

——公益的な取組みが義務化される以前から様々な取組みを行っていらつしやいますが、取組むきっかけはあったのでしょうか。

正田 当法人は昭和61年に設立され、翌年に特別養護老人ホーム松寿園、シヨートステイ松寿園を開設して以来、各種事業を展開し、現在12事業所、職員230人を超える規模となりました。

地域に暮らす方々とかかわりという点で考えると、松戸市の委託で平成10年に開設した五香六実地区在宅介護支援センター、平成19年に開設した常盤平地域包括支援センターから始まっているといえるでしょう。これらの受託実績が評価され、その後、改めて松戸市の委託を受け、平成25年には六

実六高台地域包括支援センターと明第1地域包括支援センターを開設しています。

また、昭和62年には松戸市第1号、千葉県第3号となる松寿園デイサービスセンターを開設しているほか、平成11年にはホームヘルプサービス松寿園、介護保険制度がスタートした平成12年にはケアプランセンター松寿園を開設しました。

そうした流れの中で、地域包括支援センターやデイサービスの職

員から「こんなことで困っている」という現場の声を聞いたり、施設を利用していただいている方や民生委員さんからも日常的にお話を伺っているのです、おのずと困りごとは見えてきました。

様々な取組みは、地域の人たちとかかわる中で「こういうものがあつたら助かる」という声を一つひとつ丁寧に取り、実現可能なものを取捨選択してきた結果だと思っています。

——介護保険制度や公益活動の義務化にかかわらず、住民のニーズに答えてきたわけですね。

正田 そうですね。私は平成15年から勤務していますが、平成19年当時は、どこも地域包括支援センターをやらない傾向があり、



常務理事 法人本部長 正田貴之(しやうだ・たかゆき)さん

包括を開設すること自体、私としては公益的な取組みであるという感覚を持っていました。**齋藤** 私が介護スタッフとして入職した平成10年頃は、夏になると中庭に櫓を組んで盆踊り大会を開催し、地域



の皆様が集まっていたいていました。それが唯一の地域交流でした。

この中庭は、もともとゲートボールで使用していた場所だったのですが、プレーする人がいなくなり、盆踊り以外は空き地同然だったので、平成18年に法人設立20周年を記念して始めたのが「高齢者うんどう教室」という、介護予防の取組みです。

正田 以前、公益財団法人体力づくり指導協会と自治体が協働して、地元の公園に高齢者用の健康遊具を設置し、地元のボランティアさんが運営する「うんどう教室」を見学したことがあり、その光景を見たとき、これは素晴らしいシンプルに感銘を受けました。うち

でもやりたいと思ったのがきっかけです。

当初は、体力づくり指導協会のサポートを受けて遊具を設置し、同協会より指導者を招いて職員と地域のボランティアさんと一緒に一年間、高齢者の健康・体力づくりに対する指導法・支援法について学びました。

地域住民が自立的かつ持続的に取り組むことが重要だと考えていたからですが、現在では地域のボランティアグループ「びんしゃんくらぶ」が中心となり、月に2回、毎回25名ほどが参加。参加者数は、10年間で述べ5000人を超えています。

齋藤 地域の方々が主体的に参加するきっかけ、仕かけをやること、が、公益的な取組みを行う際の基本的な考え方です。

ただし何かあったときの不安など、ボランティアさんたちに過度の負担がかからないよう、つかず離れずの関係を保つといえます。事務局は当法人、教室の運用の主役は地域ボランティアさんという形をとっています。

この「うんどう教室」は人気があったのですが、より多くの方に利用していただくため、平成23年、遊具を松戸市に寄贈して六実中央公園に移設し、住民による住民のための運動教室として継続しています。

まちの弱点を美点へ変え 地域力向上と職員の成長へ

——内容や人員配置など、取組みを実現するまで、どのようなプロセスで決めるのでしょうか。

堂前 各部署から職員が集まってプロジェクトチームを立ち上げ詳細を決めていきますが、実施後ある程度の形が整ったら、プロジェクトチームは解散するという流れが定着しています。

地域には高齢者福祉を担う六実六高台地区町会・自治会連合、六実六高台地区高齢者支援相談委員会、六実地区民生委員児童委員協議会、六実六高台地区社会福祉協議会の4団体（以下、関係4団体と表記）があり、基本的に協同して事業を行

います。

ですから「うんどう教室」のトレーナーが地区社協の役員さんや民生委員さんのこともあります。一般の参加者の中には「慣れてきたから私もトレーナーとしてお手伝いしたい」という方もいらつしやいますので、カリキュラムを1年学んで修了認定証を取得したら、トレーナーとして活躍していただいています。

正田 平成25年から始めた「あんしん電話」は、電話を使った見守りシステムです。

これは松戸市で最も高齢化率が高い常盤平で、孤独死などの高齢問題を解消するため、「どうたれ内科診療所」を運営する堂垂伸治医師が平成19年に発案されたもの



法人事務局長 堂前恵美子(どうまえ・えみこ)さん

で、その取り組みを知ったとき大いに感銘を受け、当法人でも実施することにしました。

実施主体は関係4団体で、地域の高齢世帯の方は各窓口で登録します。その方々に週1回、当法人に設置したシステム（パソコン）

から自動的に電話をかけます。電話を受けた高齢者は、自動音声に従い異常なしの場合は「1」、連絡がほしい場合は「2」、訪問し

てほしい場合は「3」を押します。「2」「3」の場合は、私どもから相手先に直接連絡し、そこで得た情報を自治会などの担当者に伝え対応してもらうという流れになります。現在、40名ほどが登録されています。

——住民のニーズに合致するようない事例があれば、アレンジしオリジナリティを出すということでしょうか。

堂前 そうですね。たとえば夏季の熱中症予防の休憩所として始めた「クールオアシス」では、施設のエントランスを開放し、水分を提供しています。ウォーターサーバーを置き、セルフサービスで誰

でも自由に水を飲みながら休むことができます。

実はこれ、新潟県の商店街で熱中症対策として水分提供をしているという話をNHKラジオで聞いたのがきっかけ。考えてみたら、

私どもの施設周辺は商店街やコンビニがありませんので、暑さでどが乾いたときに気軽に立ち寄れる場所があると助かるのではないかと思ったのです。

涼をとるスポットとして思わず立ち寄りたくなるとか、ちょっとした情報交換ができるとか、まちの弱点にひと工夫プラスすることで新たな価値を創り出すことができると思います。

もう一つ、ありそうでなかったのが雨宿りの場所です。そこで考えたのが「雨の日の♡ほっとサービス♡」。急に雨が降ってきたときは雨宿りしていただいたり、ビニール傘をお貸ししています。

傘は常時10本用意してありますので、ご都合のよいときにお戻しいただくようにしています。

小山 「スノーバスター」は、積雪時に、地域の高齢者世帯の雪かきをお手伝いするサービスです。

近所の高齢者が雪かきで困っているという情報が入ったことがきっかけでした。

雪国の方から見れば、お恥ずかしい話ですけど、この地域では雪が5センチ積もるだけでも玄関の出入りが困難になったり、買い物に行けなかったりと生活に支障が出ます。

うちの法人のケアマネジャーやデイサービスの職員からも、在宅の高齢者世帯、とくに一人暮らしの高齢の方は大変だと聞いていましたし、少しでも手助けになればという思いです。

一人で雪かきに行くこともありませんし、施設を担当する介護スタッフ

ツフ3〜4人と行くこともありま

す。ふだん在宅で生活されている方とかかわる機会が少ない職員にとっては、生活の場に触れる機会になると同時に、互助を実感する貴重な体験となります。

そのほか、地域の町会やサークル活動などに対して、地域交流スペースとして施設の会議室を解放する「貸し会議室」や、必要に応じて「車いすの貸し出し」も行っています。

齋藤 平成27年の介護保険制度改正に伴い、介護予防の推進を目的に作られたのが松戸市通所型「元

気応援くらぶ」です。これは住民主体型の地域活動で、松戸市内で42カ所もあります。そのうちの1カ所が当法人を使っています。

毎週月曜日（第5週を除く）、9時半から11時半まで、健康寿命を延ばすための様々な活動を行っています。

単に場所を提供するだけでなく、月に一度、私たち職員が40〜50分くらいお時間をいただいて、介護予防や認知症に関する講話、脳トレ、リハビリ体操などを行います。



サービス付き高齢者向け住宅
松寿園 エミシア松戸六実 ホーム長
小山日愛（こやま・ひよし）さん



認知症カフェ「カフェ・ド・オレンジ」には毎回、20～30名が集まる

住民と専門職を つなぐ認知症カフェ

——全国的に認知症カフェが広まる反面、人が集まらない、将来的な継続が不安といった声も少なくありませんが、その点はいかがでしょうか。

正田 平成28年度の実績調査では、47都道府県1029市町村にて、4267カフェが運営されています。

ですが、私どもが「カフェ・ド・オレンジ 松寿園」という名称の認知症カフェをオープンしたのは平成26年。「安心」「つながり」「認知症理解」を目的として、松戸市内の第1号店として開店しました。法人プロジェクトチームと地域のオレンジ協力員との協働で運営しています。

当法人では認知症サポーター養成講座も行っていますが、松戸市では認知症サポーターになった人で、さらに専門職と一緒に活動している場合は、オレンジ協力員として登録する仕組みを作っています。このオレンジ協力員の方々が地域にたくさんいらつしやるので、準備段階からかわっていただきました。

カフェには認知症の方、そのご家族、地域住民の方など、どなたでも参加できるとはいえ、やはりオレンジ協力員の方々のサポートによるところが大きく、おかげさまで毎回20～30名が参加してくださいます。

福嶋 以前は2カ月に1回だった

開催を、昨年度からは月1回にして、第2火曜日に開催しています。もう少し回数を増やそうかという意見もあるようですが、継続することが大事だと思っていますので、まずは月1回の開催にしています。

地域密着型の認知症デイサービス「松寿園メル・グラン」の職員のほか、包括や特養などの職員も参加し、認知症の方、ご家族、地域住民の方、多職種との出会いや会話を通じて、和やかなつながりができてきています。

認知症でも安心して暮らし続ける地域づくりを進めていくとともに、専門職としてのスキルアップをめざしケアの質が高まることも期待できます。

伊藤 私たちにとって「食は生命の源」であり、最大の楽しみともいえます。認知症カフェで栄養をテーマにしたお話をしながら「食」の大切さを伝えていきたいと思っています。

カフェでは必ず茶菓をお出ししています。

ですが、マヨネーズを加えて作るパンケーキ、牛乳もちなど、当法人の厨房から提供している「手づくりおやつ」は、「美味しい」「作り方を教えてほしい」と好評なことも嬉しいですね。

藤澤 脳トレを行ったり、認知症などの講話をしたり、音楽療法士の資格を持つ職員が音楽アクティビティを行ったり、皆で合唱したりするなど、メニューは、その時々で決めています。

誰でも気軽に参加でき、リラックスした雰囲気の中でコーヒーやお茶を飲み、おしゃべりを楽しみながら情報交換できる場所があることで顔なじみの関係が自然とできる点は、とても大切なこと。職員にとっては、実感を伴う理解を得る大事な場です。



管理栄養士 サービス調整担当課長 伊藤光子(いとう・みつこ)さん

地域のため、住民のため 職員のための貢献事業

— 認知症カフェでは、参加費をとっているのですか？

正田 認知症カフェの参加費は100円で開催しているところが多いとか、有料にするか無料にするかは賛否両論あるというところは知っていますが、当法人では認知症カフェをはじめ、すべての貢献事業は無料にしています。

伊藤 ただし、松寿園ショートステイまたはデイサービスを利用されるゲストの方に対して行う「夕食サービス」は有料です。デイサービスの利用後にわざわざ買い物に行かれるのも大変でしょうから、厨房で作った夕食弁当をお持ち帰りしていただきます。1食400円（税込み）です。

また、ランチはカレーとピラフ、スパゲティの3種類があり、1食500円（税込み）です。たとえば、入所されている奥様のご主人がお昼時に来られたとき、ご主人の食事がないと奥様は気を使われますので、そのときにお食事を

出しできれば、お二人で楽しくお食事を召し上がっていただけるとではないかと考えたわけです。少し体調が悪い方の場合、お粥にするなど、急な対応もできるようにしています。

— 取り組みを継続する中で大事にしていることは何ですか？

小山 たとえば、「うんどう教室」は10年以上経ちますが、中心になるトレーナーさんによって要素やメニューは変わります。認知症カ

フェは5年ほどになりますけれど、参加されるメンバーによってカフェのあり方、雰囲気が変わってきたという感じですね。

こうでなければいけないと決めつけず、参加される方たちと一緒に作っていけば良いと考えています。そのためにも課題を共有する振り返りの時間も大事で、「うんどう教室」はトレーナーさんと職員と、「認知症カフェ」はオレング協力員さんと職員とで、その日の評価をしながら次につなげる相談をしています。

— 地域貢献事業は、ボランティアで成り立っていると聞きますが、ボランティアについては、どのようにお考えでしょうか。

齋藤 職員は、業務の一環として協力していますので、ボランティアという意識はありませんね。決まった予定をクリアするために、現場の空気を読みながらギリギリのところを調整する必要はあると思いますが、長期的に見れば現場にプラスになることですから、信念をもって取り組んでほしいと思っています。

正田 地域の方々からすると、各施設を含め老人ホームでは「どんな人が暮らしていて、どんな人が働いているのか」「虐待のニュースを見るけれど、ここは大丈夫なのか」という漠然とした疑問があります。そうした不透明な部分を透明にするきっかけをつくる手段として地域貢献事業があるのではないかと思っています。

参加して職員の頑張りを知っていただくことで、事業所の応援団になってくれたり、そこからボランティアさんにつながることもあるでしょう。地元にある施設と顔の見える関係ができ、住民の皆様にも「安心して年をとれる」と思っていただければ、ひいては地域全体の安心につながっていくのではないかと考えています。

今後も様々な事業を展開しているかと思っておりますが、失敗を恐れず組織風土を作っていくことが大事なので、トライ・アンド・エラーをしながら、トライ・トライ・トライで進むことに意味があると思います。



松寿園デイサービスセンター・梅・グラ

二五 サブリーダー兼生活相談員

藤澤裕子（ふじさわ ゆうこ）さん

二五 統括リーダー

福嶋清美（ふくしま きよみ）さん